スポーツにおける教育・研究と実践との複合型授業の構築
―なぜ私はこの形で授業を進めるのか―

吉本 隆哉
皇學館大学教育学部助教

現在、私は大学で講義を行っている。そのことに私自身が一番驚いている。私が大学生の頃は、課外活動である部活動(陸上競技)にしか興味がなく、勉学に対して最低限の努力しかしていなかった。大学院に進学した理由も、友人と陸上競技を続けることが目的であり、自分自身の競技力の向上につなげるためだけに、スポーツバイオメカニクス、運動生理学、トレーニング科学といった学問を学ぼうと考えていた。その頃は、「陸上競技で飯が食えたらいいのに」と常に考えていたが、私にはそれほどの競技力もなく、修士課程を終える時期になっても他にやりたいことは見つかっていなかった。修士論文を書き終え、結果的に博士後期課程に進学するのだが、その理由も同じ研究室の先輩に誘われ、他にやることもないので進学するか、といった形であった。

転機が訪れたのは、博士後期課程に進学してからであった。進学のタイミングで新しく着任された教授、助教の先生方と出会い(キャラクターについては泣く泣く割愛する)、研究の楽しさ、素晴らしさを叩きこまれた。加えて、研究は面倒くさい、楽しくないという印象を持っていたが、スポーツパフォーマンスを高めるために学ぶ学問、行う研究であれば、それはこれまで行ってきた競技力を高めるための取り組みと同一線上にあると認識できた。そう捉えることで、面倒くさい、楽しくないと考えていた学問が、やりたい、楽しいと思える学問に変化した。

体育・スポーツ系の学生には、運動・スポーツと勉強・研究というものが、相反するという認識を持つ者もしばしば見受けられる(少なくとも私はそうであった)。しかし、右記のように思考を切り替え、両者をつなげることができれば、必要な知識・技能を円滑に身に付けるための学ぶ姿勢を得られると考えられる。

前述したように、私は勉学に関していわゆる劣等生であった。そのような私が、思考を変容させる(させられた)ことで、スポーツ科学という学問を好きになり、結果的に論文を

書き、教育を行っている。この現実は、勉強が苦手な学生が、大学で講義を行い、研究活動を行うまでに、どのような経路をたどれば良いのか、ある一つの道を示すこととなる。

私がスポーツに関する学問を教育する上で大切にしていることは2つある。

一つ目に、内容の説明を丁寧に行うことである。スポーツバイオメカニクスの講義では、複雑な数式を扱うこともしばしばある。左記の数式は、滞空時間から垂直跳びの跳躍高を導出するものである。

$$h=1/8gt^2$$

hは跳躍高、gは重力加速度、tは滞空時間を指す。数学や物理を専門としている学生であれば、右記の数式が出ても、マイナスの反応は示さないであろう。基本が整っていると、慣れがあることは非常に素晴らしいことである。

しかし、スポーツ科学を専門とする学生であれば、この数式を見た瞬間に拒絶反応を起こす可能性がある。もちろん、学ぶ上での基本が整っていないと言われればそれまでであるが、丁寧に説明したところで大した時間はかからない。したがって、一つ一つのアルファベットが何を表すのか、実際にどのような数値が入るのか、それらを具体的に示し、答えまでの道のりを丁寧に解説すれば、この問いを解くことのできる学生は格段に増大する。基本的なことではあるが、いくつかの参考書を確認しても、具体的な数値による解説は割愛されていることが多く、理解している前提で論が進められている。専門家の常識は、学生の非常識であることはよくある。専門家には、その差を埋める努力を多少行うことも必要だと述べたい。

二つ目は、実際に計測した値を用いることである。体育・スポーツは、身体運動を伴う活動となる。自分がどれくらい速く走れるのか、どれくらい高く跳べるのか、運動・スポーツを行う者であればそこに「知りたい」という欲求が生まれる。この欲求が解答への意欲を高める。机上の数値のみでは、パフォーマンスのイメージは難しい。したがって、活動の中での測定値から、問いを出題することによって、問題を解こうとする意欲を高めた教育を実行できる。

私が右記のような形で教育・研究と実践を複合させた取り組みを行う理由は、劣等生であった私が、少なくともこの方法で学んでいれば楽しかったと思うからである。現在の方法が正しいかどうかはわからない。ただ、今はこれが正しい方法だと信じ、一人でも多く、運動・スポーツに学問をうまく生かすことのできる人材を増やしたい。

中部圏から真の国際人材を輩出する

中京大学国際学部・佐道 明広［国際学部長］

1 国際学部はなぜ誕生したか

２０２０年４月、中京大学国際学部が発足した。これまでの国際教養学部と国際英語学部を土台とし、新たな教育理念のもとでの誕生となったわけだが、なぜ中京大学が国際学部という新しい学部を発足させたか、その教育理念とは何かについて説明していきたい。また、実際、国際学部がどのような教育プログラムを有しているかについても、併せて説明したい。

周知のように、現在、大学は国公私立を問わず未曽有の変革期の中に置かれている。それは、少子化に伴う入学志願者層の減少や文部科学省による定員管理の厳正化、職業教育に特化した新しいタイプの大学の認可といった問題にとどまらず、グローバル化の進展や高度な情報社会の出現等による社会の多様化・複雑化を背景としており、高度な能力を有した人材の育成こそ、現在の大学が社会から求められている喫緊の課題だからである。そのため日本中の大学がさまざまな改革を行っている。またこれは日本にとどまらず、世界中の大学の課題と言ってもよいだろう。

さらに言えば、日本における製造業の一大拠点である中部東海圏こそグローバリゼーションの影響を大きく受けていくことは必定である。生産拠点の海外進出だけでなく、必要な人材や情報の確保といった双方の面、すなわちアウトバウンドにおいてもインバウンドにおいても、グローバル化に対応できる人材を育成することは、中部東海地域に立脚

する大学の使命である。しかしながら、伝統的に中部・東海圏の大学は保守的な傾向が強く、グローバル化に対応した改革が進んでいるとは言い難い面があった。中京大学は、これまでも新しい事態に対応し、既成の学部の改組や新学部設置などに取り組んできた実績を有している。前述のような状況に鑑み、新しい教育理念に基づいた学部の必要性について、「NEXT10」という長期計画の中で検討し、創設したのが国際学部である。

さて、グローバル化に対応して育成すべき人材像として浮かぶのは、世界の共通言語として通用している英語に関する高い運用能力を持つだけでなく、複雑・高度化した社会のニーズに対応できる専門的な知見や技能を有し、国際社会の多様性を認識して相互のコミュニケーションを円滑に進めることができる人物である。従来の国際系学部では、どうしても語学教育に偏重する傾向があったように思える。しかしそれでは不十分で、海外の文化や考え方、歴史などについての理解、すなわち深い教養と、多様化した課題に対応できる高い専門性が必要なのである。そうした人材の養成には、学部教育だけでなく、大学院での教育も連動させて考えていくことが必要と考えられる。

さて、中京大学で国際系学部と分類されるのは、既設の国際教養学部と国際英語学部である。どちらもそれぞれ教育理念を掲げ、より良い在り方を求めて、学部ごとに改革を行いながら特色ある教育を展開してきた。

しかしながら、国際教養学部においては専攻語の習得が、必ずしもそれを生かしたキャリアにはつながっていかないこと、英語の学習時間が足りないことにより「2言語の運用能力の習得」にはなり得ていないこと、外国語系学部にもかかわらず語学の教員免許が取得できないことに弱さがみられた。国際英語学部では、英語の多様性を学び、英語の会話力を高めるという特色ある教育を行ってきたが、英語を使って何を伝えるか、行うかといった面での教育に不十分さがあった。

一方、近年中部東海圏では国際系・外国語系学部の新設が相次ぎ、競争が激化している。さらに全国的に見ても、関西・関東地区で、英語徹底教育をベースに教養を身に付ける高偏差値大学が開設されている。

以上のような他大学との競争を考えると、これまでのような個別学部の改革で対応するのは限界があると考えたのである。すなわち、これまでの個別学部の改革を超える

新しい発想に立った新たな学部で対応することが必要と考えたわけである。また、前述のように、少子化の中で学生の確保競争が激化している中で、中京大学としても、中部地域の学生を獲得するという守りの姿勢ではなく、全国的に学生を獲得するための態勢を構築していくべきであると考えた。そのためには、中京大学ではこれまで実施されていなかった新しいコンセプトによる学部が必要と考えたのである。

2 国際学部のコンセプト

グローバル化の進展に伴い、ヨーロッパなどでは地域統合が進んだことによって従来の「国境」という概念が変化し、かつては複数の独立した主権国家で構成されていた地域が、今では一つの連邦国家とも言えるほどの状態にまで至っている。異なる歴史や文化的伝統を持つ人々が、共に一つの社会で生活していくという、多様性を前提とした社会が生まれている。こうしたことは、グローバリゼーションの進展によって世界の各地で見られる現象となり、国際社会との強いつながりの中で発展していかなければならない日本にとって、そうした社会で活躍する人材の養成が極めて重要な課題であることを示している。

他方、世界各地で排他的なナショナリズムが高揚し、文明の衝突と言われる現象も現れている。こうした多様性の否定に結びつく傾向を克服していくことも現在世界の課題であり、そうした傾向を生む要因の一つとしての貧困や地域間格差問題、さらには気候変動といった自然現象がもたらす課題についても、世界的な協力体制の下で解決に向けて取り組んでいかなければならない。

そうした課題に取り組むには、国際機関や各種のNGO、さらに国家機関で活動する人材の養成も急がれている。また、グローバル化が進展する国際社会の中で変化が著しい国際経済の分野において、国際的あるいは国家的な経済政策の立案や、国際ビジネス分野で活躍できる人材を育成することも急務である。

このように世界全体が激動している現在、対応すべき課題・問題は複雑かつ多様化していることが多く、一つの学問領域に基づいて追究することは難しい。また世界の多様性への理解が求められている現在、母語の言語能力しか持たない人材がさまざまな課題に取り組んでいくことは困難であ

る。すなわち、グローバル社会における複雑な課題・問題に取り組んでいくためには、複言語能力の涵養に努め、「人」の行動や「社会」の動きをさまざまな学問領域から学修し、多面的に追究できる知識・能力を身に付けなければならないのである。国際学部は、そのような能力を身に付けた「人財」を養成することを目的として創設されたのである。

以上のような点を踏まえて、国際学部が考える真のグローバル精神を持った人の条件とは、以下のようなものである。

(1)未知なる環境で自ら考え行動できる、しなやかな知識を持った人物であること。

(2)他者の気持ち、考えを的確に理解し、自らの考えを正確に伝えることができる人物であること。

(3)知識・知恵・見識を持ち、多種多様な言語・文化を持つ世界の人々と交流できる人物であること。

以上のような条件を備えた人財を養成するために、国際学部では、中京大学の総合大学としてのスケールメリットを生かして、国際社会で活躍できる外国語運用能力をもとにした「人文科学」と「社会科学」の知識・能力を複合的に修得させる教育を実施することにしている。そして、幅広い教養を前提として、専門性の高い知識・能力を持って世界の各地・各分野で直面する課題・問題に対して、自ら考え行動する知識人・職業人として、世界の未来を切り拓くことのできるグローバル人財を育成することを目標としている。

3 国際学部の特色

(1)国際学部は国際学科と言語文化学科の2つからなる。

(2)原則として、学科を横断し、あらゆる科目履修が可能である。各学科には複数の専攻があり、またその専攻の下には複数の専修がある。

(3)ダブルメジャー制を導入し、原則、2つの専門を深く学ぶ。

- 主専攻(メジャー)は所属する専攻(専修)から選択
- 第二主専攻(サブメジャー)は2年次が終了するまでに別の専攻(専修)から選択

(4)ゼミ・卒業論文作成を必修とする。

(5)英語の授業のみで学位が取れるグローバル・リベラル・スタディーズ専攻を設ける。

(6)国際語としての英語の運用能力を身に付けさせる

（ＣＥＦＲ基準でＣ１程度）。
・両学科共通の英語プログラムを設置（1年次春学期、60分授業1日3コマ、週3回など）
・学部生全員が1年次秋学期に英語圏にセメスター留学
・全専攻（専修）に英語で行う授業科目を一定数設置
(7) 英語以外のさまざまな外国語教育の充実を図り、プルリンガルの学生を育成する（ＣＥＦＲ基準でＡ２-Ｂ１程度）。

学生は第一外国語として英語を、第二外国語としてフランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語、ロシア語、イタリア語、韓国語から1つの言語を選択し、履修する。

グローバル・リベラル・スタディーズ専攻の学生は日本語を履修する。第二外国語の中には副専攻（マイナー）にできる言語もある（言語文化学科の複言語・複文化学専攻では第二外国語を副専攻とすることが原則）。

以下、国際学部の2つの学科について説明したい。

4　国際学科のコンセプト

冷戦終了後に噴出した民族紛争、テロの多発など、さまざまな課題を抱えている。そうした課題は政治的、経済的あるいは歴史的なものなど多岐にわたっており、対応する主体も国連のような国際機関から国家、あるいは各種のＮＧＯなど多様である。

またグローバル化の進展だけでなく、高度の情報化や産業構造の変化など、国際社会との密接な関係の中で生きていく日本にとって、国際経済の動向やそこで行われるビジネスの内容などに関する高度な理解が求められている。

従って国際学科は、国際社会の現状を的確に理解し、多様な人々と円滑なコミュニケーション能力を有し、複雑な諸課題に対応できる高度な専門的知見と技能を有する人材の養成を課題としている。

5　国際学科の特色

(1) 本学科では4専攻7専修を設置する。
(2) 「人」の行動に注目した専攻として、国際人間学専攻を設置し、哲学・人間学専修とグローバル・ヒストリー専修を設置する。
(3) 「社会」の行動に注目した専攻として国際政治学専攻

と国際経済学専攻を設置する。
(4)国際政治学専攻には国際政治学専修と国際開発学専修を、国際経済学専攻には国際経済学専修と国際ビジネス学専修を設置する。
(5)英語を母語とする、または英語を第二言語とする学生を対象にした学際的専攻として、グローバル・リベラル・スタディーズ専攻(専修)を設置する。

6 言語文化学科のコンセプト

言語文化学科は、特に言語・文化の個別性(多様性)と普遍性(相対性)の理解を深めることをその学びの中心とし、真のグローバル精神を涵養することを目的とする。

言語と文化には、日本語・日本文化、フランス語・フランス文化、中国語・中国文化というように個別の言語、個別の文化がある。

多種多様な言語・文化を持つ世界の人々と交流するためには、社会全体の動向を知ることだけでなく、個人が複数の言語と文化を理解し、有していることが重要である。これにより、他者の気持ち、考えを的確に理解し、自らの考えを正確に伝えることができ、また未知なる環境で自ら考え行動できるようになるのである。

7 言語文化学科の特色

(1)言語文化学科は英米学専攻と複言語・複文化学専攻の2つからなる。
(2)英米学専攻では、英語学・英語教育専修と英語圏文学・文化専修を設置し、世界共通語とも言える英語とその英語が話される英語圏の文学・文化について学ぶ。
(3)複言語・複文化学専攻では、第二外国語を副専攻とするため、複数の外国語を学ぶ機会がある。

言語学専修と異文化コミュニケーション専修を設置し、個別の言語・文化の学びに加え、専攻科目を通して、言語と文化の普遍性(相対性)の理解を深める。
(4)言語文化学科の専攻を主専攻とする学生は教職課程(英語)を履修することができる。